京都教育大学 教育資料館 まなびの森ミュージアム

今月の逸品

京都市伏見区深草藤森町1
☎：075-644-8537
✉：manabi@kyokyo-u.ac.jp

NO.68 2024.4～2024.5

MUSEUM OF EDUCATION

＜拡大図＞

「土製円盤」

醍醐遺跡（滋賀県長浜市）出土

歴史の授業の序盤で、多くは４月だと思いますが、「縄文土器」は必ず扱われる考古遺物です。しかし、縄文時代の人々が制作した焼物には、「土器」以外にも「土偶」やアクセサリー（耳飾り等）をはじめ色々なものがあります。今回取り上げる「土製円盤」もその一種です。

これらは、京都教育大学の学長を務めた考古学者・小江慶雄（おえよしお）（1911－1988）が昭和 26 年（1951）から同 27 年に調査した滋賀県長浜市（旧・浅井町）の醍醐遺跡から出土したもので、教育資料館では直径約３～６センチのものが全部で 17 点収蔵されています。円盤自体から制作年代を割り出すのは困難ですが、これらと一緒に出土した土器等を手がかりに縄文時代中期（紀元前 3500－2500 年頃）と推定されています。

「土製円盤」は、どのように使われたのでしょうか？考古学では通常、形状や素材、過去の記録や民俗事例などを手がかりに遺物の用途を推測していくのですが、土製円盤については実はまだよくわかっていません。いまのところは、縁が磨耗しているものが多くあることから研磨具とする見解が有力にみえますが、他にもおはじき（計算道具や玩具）であるとか、祭祀道具ではないか（わからないときの定番？）とか、様々な説があります。

今回のように縄文時代まで遡らずとも、それを使う人がいなくなると、モノの性格は次第に忘れられていきます。技術の進歩が著しい現代社会では、そのスピードは一層増していくでしょう（皆さんの愛用品が「用途不明」になる日もそう遠くないかもしれません）。教育資料館にはそうした「用途不明」になる一歩手前のものを含め、かつて現役で使われていたアイテムがたくさんあります。ぜひ、見に来て下さい。

主要参考文献
・海老原郁雄「所謂土製円盤の用途について」『栃木県考古学会誌』９、1988 年
・今塩屋毅行・加藤真理子「宮崎県都城市嫁坂遺跡出土の土製円盤（板）」『宮崎県埋蔵文化財センター研究紀要』６、2021 年

執筆者：中村　翼（社会科学科准教授）

※附属図書館で展示しています。